



苦労は「請」うてでもしろ 損して「徳」とれ

宇光軍人 vol.54

人のために動くから「働く」

令和2年7月豪雨による洪水で被災した人吉球磨や八代で、炎天下、泥をかき出し、ぬれて重くなった畳を運び出すボランティアの姿。その中に前田實さんはいいた。

豊野町に暮らす前田さんは、8月末までの1カ月半の間に30日以上ボランティアに行った。東日本大震災では、震災の1カ月後に夫婦2人で軽ワゴン車に支援物資を満載し、東北へ向かった。車中泊しながら2週間、泥かきなどの手伝いをした。「災害時はできるときにできるしこ。少しずつのマンパワーが必要なんです。」と話す。

親の苦労を見てきたから

「戦後、あの時代はみんな苦労していたと思います。食糧難でしたしね。6人兄弟の4番目で家は農家でしたが、父は出稼ぎでいいことも多く、母が苦労しながら育ててくれました。親の背中を見て育ったから、人のために動きたいと思うようになりました。」

生まれは菊陽町。1953(昭和28)年、当時6歳だった前田さ

んは、白川大水害の洪水による大きな被害と、共助により復興していった町の姿を覚えている。「一人一人の力は小さいけど、集まるとすごい力になると感じました。」

人との出会いが生きがい

中学を卒業すると、働きながら学問ができるからと企業内学校のあった九州電力に入社した。26歳から5年間、通信制の大学にも在籍した。「普段は熊本でレポートを提出するんですが、年に30日間は東京のキャンパスで授業を受けるんです。教授や学生、全国から来るいろんな人に会えるのがとても楽しみでした。」

も楽しみでした。」

「若い頃、海外協力隊に憧れて、どこでも行ってみたいと強く思っていました。みんなが車を買う時代、その分のお金で旅に行き、土地の人に会いたかったんです。」

秋田でボランティアをしたときにもらった背負子
今も大事にとってある



東日本大震災と球磨川

震災後は「行けば何か力になれるはず」と考え、妻の博子さんと2人で車を走らせた。被災地に入ると、家が流された跡や、流された衣類が高い木の枝にひっかかっている姿を見て、言葉を失った。

「7月に人吉にボランティアで行ったときに、球磨川の姿が東北に重なって見えました。2カ月たっても泥が残る家があります。遠慮して、手伝ってって言えないのかもしれない。元の生活が戻るにはほど遠いんでしょうね。」

苦労は「請」うてでもしろ

「好きな言葉があるんです。苦労は請うてでもしろ、損して徳とれ。漢字は違うかもしれませんが、自分にはこっちがしっくりくるんです。周りに生かされているから、日々一生懸命に生きたいですね。」

今日も誰かに出会いはながら、前田さんは人のために汗を流す。

前田 實 Maeda Minoru

昭和22年生まれ。菊陽町出身。定年後に家を建てるための土地を探しているときに、五ヶ瀬から下るときに見えた景色にほれ込み豊野町に移住。九州電力に64歳まで勤務し、現在も年に4~5カ月間、電柱、電線の巡視点検作業を行う。東日本大震災や令和2年7月豪雨など、数々の被災地でボランティア活動を行っている。



妻の博子さんは「私は夫について行くだけ」と笑う